

「許子（もとこ）。お前たちは、おかあさんと一緒に逃げるんだぞ！  
絶対にはぐれないようにしなさい。」

「はい！」許子は次女のイクコの手を握ってもう出る用意は出来ている。

「父ちゃん。いっちゃヤダ？怖いよ！」一番下のノリコはもうなき始めている。

「ノリちゃん大丈夫よ？ノリちゃんはおかあさんと手つないで逃げなさい。いい！おかあさんとはぐれちゃダメよ！」イクコがノリコの涙で濡れた手を取って勇気付ける。

「じゃあ、かあさん先行くよ！」

「気をつけて。無理はなさらないでください。」

「ああ」父は軍需工場の防火活動に向かって玄関を飛び出していく。

「じゃあ。お母さん。僕らも逃げよう。」さすが男の子。タダオはまだ10歳にもならないのに皆を守ろうと張り切っている。しかし一歩外に出るともうあちこちから火の手が上がっている。いつ死ぬか分からないという恐怖で体中が震えてくる。タダオだけではない。しっかりしなければと思いつつも母も足の震えが出てくる。

「グオー、グオー」遠くの方から不気味な爆撃機のうなり声が聞こ

えてくる。

「ゴォー、ゴォー」音が段々近づいてくる。

「ヒューウ、ヒューウ」悲しみを誘うような落下音。人々の死を運命付けるような鳴き声にも聞こえてくる。焼夷弾。

「ドドドボー」あっちでもこっちでも火柱が立つ。

「グゴー、グゴー」いつもより爆撃機の音が大きすぎる。空を仰いで見たところ、**B29** が真上を飛んでいる。空は漆黒（しっこく）の暗闇。**B29** は銀ピカに耀く。**B29** の先頭部分は半球形のガラス張り。爆弾の着弾目標を決めるため、その様な形になっているのだが、そこにいる米兵が見える。私たちが殺しに来た兵士の顔が炎の光に反映してゆらめき、絵本でみた鬼のように不気味な笑いで口が裂けているのか。あっちの空にもこっちの空にもいる。いや私達が彼らの真下にいて成す術（すべ）ももっていない。地獄の火炎に照りだされて右往左往している芋虫ども。

「ヒューウ、ヒューウ」

「ドドドボー」

「キーツ」

もう悲鳴しか出ない。炎の上がる中で母親も子供たちも動けなくな

ってしまった。いや腰が抜けて動けない。さすが強気のタダオも何も出来ない。誰も立ってくれない。一緒にいるしかない。

「何やってるんだ。早く逃げろ。」

そんな風に固まってしゃがみ込んでいる家族を見て、見知らぬ人が声をかけてくれた。

「さあー、立って逃げるんだ。」手を貸し、肩を貸してくれる人たちがいた。いつどのように動けるようになったかも分からない。とにかく逃げるだけ。

「グゴー、グゴー」

「ヒューウ、ヒューウ」

「ドドドボー」

「キャーツ」

轟音。落下音。爆音。阿鼻叫喚。とにかく火のないところに、逃げるしかない。皆が進んでいく方向は浅草観音堂。そこには広場があり、半防空壕もある。あそこが一番安全のように見える。ゾロゾロ、人の数も増えてくる。

ゾロゾロ。半防空壕はわずか1 m位しか掘っていない簡単なもの。

でも、一時的にでも身を隠すには安全に見えるのか。許子たち家族

も父を除いてどうにか。一時の安全をこの半防空壕で保っていた。どれくらいいたっていたのか。空襲も遠ざかっているように思えた。許子はその防空壕のフタの隙間からキラキラ輝く光が不思議に思い、フタを少し明けて外をのぞいてみた。輝いている。雷門も、柱も、石灯籠も。

焼夷弾。その恐るべき火炎。原料はガソリンをゼリー状にしたもの。ベタつく。酸素があればいくらでも燃える。その温度は千度にまで達するという。

千度。

これは陶磁器が釜の中で光輝く温度帯。1200度ともなれば、釉薬が溶け始める。

輝く、輝く火の海。

「お母さん見て。周り中火の海よ。」

「ええ！あ？いけない。お堂も崩れ始めているわ。皆逃げるわよ！お母さんから離れないで！隅田川よ。隅田川に逃げるわよ！」中にはまだこのほうが安全だ。ここにいたほうがいいという人もいた。運命を分ける刹那。しかし、母は浅草寺が焼け崩れてしまうことが、もう私達を守りきれない。と。言ってくれている様に思えたのか、

母は躊躇せずに子供たちに飛び出すように促す。が、そこは熱風。

火の粉の渦巻きが押し寄せる。

「熱いよう。母さん。」ノリコが叫ぶ。

「頑張って。走るのよ。」

火炎をよけ、右に逃げ、左に戻る。わずか、300m位の距離なの

に、なかなかたどり着けない。

「走って！ノリコ！タダオ！イクコ！走って許子！」

走っているのは自分たちだけではない。皆考えることは同じ。隅田

川へ、隅田川へと。

「イクコ？イクコ！」母はイクコが近くにいないことに気づいた。

「イクコ！イクコ！」イクコは兄弟の仲でも一番元気。病気にもめったにかからない。だから、他の兄弟は皆戸籍以外に別の名前を与えているが、イクコだけは別名はない。一番元気。だから先に隅田川に向かっているはず。母は隅田川で会えると信じて急ぐ。

イクコははぐれてしまった。炎を避け、右により、左に曲がるうちに違う道から隅田川を目指すことになってしまった。でも右からも炎。左からも前方も。熱い。どこか炎のないところに行かないと、煙にまかれ、炎にあおられ、近くにいる人も誰だかわからなくなっ

てしまった。今は家族ともはぐれてしまった。でも隅田川にいけば・・・。熱い。どこかにかくれないと。

その後姿もすぐに煙と炎で隠されてしまった。

「グゴー、グゴー」

浅草の東を北から南に墨田川が流れている。その隅田川のもっと南の下流に築地がある。その築地に関門橋で有名な勝ち鬨橋がかかっている。その川べりで B29 の行き先をみている信利少年。どの機も低空飛行で米兵の横顔がまじまじとみれる。行く先の光に照らされて。

北の地平は炎で耀き、空は煙のふくらみまでが鮮やかに見える。

「あんなに燃えているのに、まだ爆弾投下するんか？」信利少年がそうつぶやいた時浅草方面で、爆弾が空中で爆発。と思いきや、火の粉が飛び散るように爆弾が散っていく。逃げる人々を囲い込むように火の粉が落ちていく。花火大会の「しだれ桜」のように。クラスター爆弾。地上に落ちたその爆弾が報道陣のフラッシュのように、連続して地上で閃光を放つ。あれでは生きられんじゃないかと、思った瞬間、

「ヒューウ、ヒューウ」

「ドドドボー」

やばい。爆弾が落ちた。

何を思ったのか、B29 のたった1機からだけ、ひとかたまりの、爆弾が信利少年の近くの民家に落ちた。

「急げ、急げ」男たちは皆消火活動に走っていく。信利少年も竹棒の先に縄をくくりつけた「火はたき」という道具をもって懸命に消火にあたる。だが、なかなか消えない。粘っこいゴムが溶けて燃えるように、はたいてもまだもえつづける。延焼だけは、まぬがれた。もう B29 が上空を飛んでても爆弾の落下音でなければ、耳に入らない。自分たちの地域を守るだけで、男たちは精一杯。信利少年もあの夜、あの「しだれ桜」を見たのが最後。その「しだれ桜」の下に浅草松屋デパートが？

ドラマ「東京大空襲」舞台となった「言問い橋」は、浅草の北東にある。地図で見ると、右上。そこから南西に下流にそって 600m位いくと、地図で見ると浅草の右下真ん中気味のところに吾妻橋がある。その手前北側に浅草駅があり、その駅前デパートとして、当時 6階建てのモダンな松屋デパートがあったそう。

米軍は今回「囲い込み作戦」を取っている。浅草などの下町の周囲

を焼夷弾で「火の壁」を作り、更にその中を徹底的に焼き尽くす二重作戦。国民学校などの鉄筋建築物は更に狙い打ち。避難してきた人々がいるところへ爆弾を落とす。ちょうど「言問橋」に逃げ惑い、殺到した人々がフラッシュオーバーにより、自分たちがかぶっている頭巾、帽子、あるいは上着から炎が上がり始めた頃、この松屋デパートも最後の時を迎えようとしていた。

母、許子、ノリコ、ケンはどうにかこうにか隅田川にたどりついた。しかし、ここへ来たのは何も人々だけではない。火の粉、煙、そして炎までが追ってくる。この日はあいにくの北西風。浅草寺からみると松屋デパートは南東にある。この日の風から考えれば風下。よく、火事の際は風上へ逃げろというが、火の勢いのすさまじさ、風の強さでなんと皆は火の魔の手に追っかけられながら逃げてきただけ。その追っかけごっこはまだ終わっていない。

火の粉の吹雪が顔をよぎる。煙が地をはってくるたびに咳き込む。母親は何か少しでもいいからこの火勢を防いでくれるものはないかとあたりを見回す。見回すといっても普段はここからでも見える「言問橋」などは火の壁、煙のカーテンで、全くどんな状態になっているかなど、皆目検討がつかない。見えるのは眼前に立っている松屋



デパート。まだ延焼せずに火の光りに照らされながらも立っている。

「松屋デパートよ！」

「松屋デパートの下に逃げましょう。」

と、母親が言った刹那。

「グゴー、グゴー」

「ヒューウ、ヒューウ」

「危ない。ふせて！」

「ガギガギ、バギバギ」

松屋デパートにも爆弾が落ちた。

「ドドドカーン」地震のように地鳴りがする。

「バリバリパリーン」全ての窓が破裂。

「ドドドボー」

窓という窓から炎がふきだした。

炎の火柱が目の前に立ち上がった。もう逃げ場がない。前面の火柱。

右からは折からの風によって、火の粉の軍団が目の前を通り過ぎて

いく。逃げ場所といたら隅田川しかない。しかし、その水はどれだけ冷たいか。

「母さん！ どうする？」許子が川面を見ながら母親に声かける。

「ダメ、冷たすぎる。飛び込んだら今度は上がってこれないわ。」その当時は現在のようにバリアフリーなどはない。「川との共生」などと階段状の護岸などない。洪水を防ぐため、どこも1 m以上の高さ。入ったら最後、どこから上がれるかわからない。

「皆うつぶせになって。」

これしかない。炎は上に上がるから、少しでもふせぐとしたら、地にはうしかない。確かに炎は来なかった。しかし、熱い。フラッシュオーバー。そうこの状態がおき始めた。輻射熱。反射熱により、炎が直接物体に触れていないにもかかわらず、突然炎がついてしまうこと。これは現代建築物の火災の中でも恐ろしい現象であり、おきやすい火災状態。今の建物は暑さ寒さから室内を守るため、断熱剤が入っているのが当然。しかし、いったん室内で火災が起きるとこれがあだになる。室内の温度は恐ろしい速さで上昇し、炎から1 mも2 mもはなれているところにある衣服にまで炎が飛び火する。突然に。

天空まで炎でこがし始めた、ここ隅田川沿いはまさにこのような状況を招き始めた。

ノリコの背中に炎がつき始めた。ケンの背中も。母親がノリコにか

ぶさり、許子がケンの背中をおおって火を消す。しかし、そんな二人の背中にも火がつく。

「たすけて！」誰かが振り向いてくれるなんて期待も出来ないのに母親はさげんだ。叫ばずにはいられなかった。「もうダメだわ。とびこむしかないわ！」

母親が左手でノリコの服の襟筋をつかみ、右手で許子の左手を握り締めて、最後の決断を下そうとした。

その時である。母親の声を聞きつけてくれたのか一人の男性がバケツを持ってかけつけてくれた。

「腰ひも、腰ひもをかして！」母親も許子もノリコも腰ひもを取って渡した。男性はそれを結んで一本にし、端をバケツの取っ手に結びつけると、隅田川から水を汲み始めた。

「皆ならんで！」

許子はびっくりした。自分たちだけではなく。何組かの家族もうつぶして火をよけようとしていた。その男性は皆に水をかける。何杯も何杯も。もちろん、本人も熱くなってきては頭から水をかぶりまた皆にもかぶせる。なんとたった一つのバケツが何人の命を救ってくれたことか。

いつしか B29 の編隊も姿を消した。炎の勢いも次第に弱まり、水をかけてもらわなくてもいられるようになった。家族は男性にお礼を言った。男性は腰ひもをかえすと、火勢の強い方へ消えていった。空襲警報が解除されると、炎がまだあちこちについていても、冷たい風を感じるようになった。この日の気温は 2 度くらい。しかも北西風が 30 m 以上吹いていたという。

ガチガチと歯が鳴り始めた。皆の体も震え始めている。

「いけない。皆火にあたって。早く乾かすのよ！」

ほんの少し前まで怖くて逃げ回っていた炎が、今度は自分たちの寒さをしのぐ暖炉になろうとは？

「おかあーさん！どっちーい？逃げるの、逃げないの？」ノリコがおかしそうに聞いた。

「そうよ。おかあさん。さっきまで何ていっていたの？」許子もいう。母親は言葉の逃げ場を失ってきた。

「早く来なよ！あったかいよ！」ケンはそのような母親との問答などするよりはと、もう先にいって暖をとり始めている。

「ほら、ケンがもう暖まっているよ。行こう。」

母親は救われるように、ケンの方へ行く。許子もノリコも寒いのは

同じ。もう母親をからかうのはやめにして手をつないで後からついていく。

「暖かいねーおかあさん。」ノリコが母親の隣に立ちながら言う。皆の体から湯気も立ち始めてきた。一番端にいた許子も皆が手をかざして暖を取っている姿を見て、うれしくなっていた。でも、かあさんも心配事があるはずなのによく何も言わずにいられるわと思っていた。許子は後ろを向いた。そこは、真っ暗な隅田川があるだけ。いかに下火になったとはいえ、その一方だけあいているだけで、ほとんど周りが火で囲まれている。もう少し火が弱くならないと探しにも行けないわ。許子は上着を脱ぎ、また火の方に向きなおって、それを乾かし始めた。

どれくらい、たったのだろうか。皆疲れから、眠くなってきた。許子もウツラウツラし始めてきたとき目の前が真っ暗になった。

「ヒャーッ」許子はびっくり。「だーれだ！」誰かに目隠しされている。

「あ！イクコちゃん？イクコちゃんね！」

「イクコ。よかったー。無事だったのね」母親もすぐに声を聞きつけて、振り向きざまイクコを抱きしめた。

震える手で顔をさわり、手、胸、足を触る。母親はうれしさでもう何も言えない。

「どこ、逃げ回っていたのー？」ケンが聞いた。

「へへへー！どこだと思う？」イクコが胸はって聞き返す。

「わかあーんない？教えて！」

「べんじょ。便所よ。公衆便所。」

「公衆便所？」皆が不思議そうな顔をする。

「うん。公衆便所。火があっちからも、こっちからも来た時、全然火が当たっていない場所があったの。それが、公衆便所だったの。そこに逃げていたらさー。隣のおばさんも来たのよ。そこで二人して火が弱くなるのを待っていたの。」

「ずっとそこにいたの？」ノリコがきく。

「うん。火が弱くなったから、私おばさんに言ったの。お母さんが隅田川へ逃げるのよって言ってたから、そこへ行けばお母さんたちに会えると思うって。そして、おばさんと別れたの？おばさんは家族を探しにいったわ。」

「それにしてもヤダー。お便所行った手で私の顔さわったの？」許子が不服そうに言う。

「ちゃんと拭いてから触ったわよ。でも許子姉ちゃん。姉ちゃんの顔の方が汚いわよ。すみだらけ。ほら、私の手にまでついているわ？」  
皆は笑えた。笑うことが出来た。増本家はひとりも欠けることがなかったから。あの惨事の中でなんと幸運だったことか。

翌朝、全てがなくなっていた。父も無事帰ってきて、家の前で会うことができたが、家はない。炭だけ。父は扇子の製造を生業としていた。アメリカ軍は日本の家屋を木の板と障子からできているという  
ことで「ペーパーハウス」と<sup>やゆ</sup> 揶揄して呼び、そのため焼夷弾の使用を発想したわけだが、まさに増本家は典型的な「ペーパーハウス」と言ってよい。あの空襲のなかで、扇子が 材料が 火の花びらのようにあるいは蝶のように舞いに舞って、散ってしまった。

増本家は東京にいられなくなった、何もないから。山梨の知人だけが便りと、皆で行くことにした。全てを無くした増本家。あるのは家族の愛情だけ。でもこの愛情が壊されなかっただけは本当に幸運

（やがて五男の明男も疎開先の仙台から無事もどってくる）。あたりは一面の焼け野原。死体もいたるところに転がっている。ところどころに黒焦げになった電柱がたっている。そんな中を家族は山梨に向かってトボトボと歩き始めた。生きるため。この幸運を守り抜

くため。

同じ日、信利少年は必死になってリヤカーを引いている。汗だくになって。荷台には一人の女性を乗せている。リヤカーといっても火災でタイヤのゴムはない。やっと <sup>かちどきばし</sup> 勝鬨橋 の真ん中まできた。

「おばちゃんちょっと休もうね？」

「信ちゃん悪いね！歩けたらよかったんだけどね」

「大丈夫だよ。それよりおばちゃんのほうこそ大丈夫？」

「うん。今ちょっと落ち着いているみたいだから。」

信利は右手のお台場方面を眺めみた。朝より山が 2 個 3 個増えている。その当時、お台場には「水上警察？」があり、そこで、水死体をあげていた。もちろん夜中にあった大空襲の犠牲者。余りにも多かったのが丘のように山盛りになってしまっていた。朝、信利が迎えに行くときはそれ 1 つだったのが今は 2, 3 個増えている。橋の欄干から下をのぞくと、まだまだたくさんの死体が浮いている。下は「死」の川。上は「生」の橋。そして、俺は新しい「生」の誕生のために働いている。生きなければ。生ある限り生きなければ。

「おばちゃん、もうちょっとだからね。」

信利少年は手に力を込めながら、ギーギー音がでるリヤカーをゆっ



くりと引き始めた。中天には、太陽が照り輝き、早春とはいえ、その日差しは強く熱かった。

## 後書き

4月7日頃。私は日本テレビのドラマ「東京大空襲」を見て母親がいた浅草もこの状況とほとんど変わらないのではないかと思い、母親そして増本家がよく生き残ってくれたなど感慨を深くしておりました。私達は普段あまり「生」や「死」のことなど考えて生きてはいないと思います。大事に大切に。ところが母親そして父親があの戦争で生き残っていてくれなかったら自分は生まれていなかったんだという事実から考えた場合、なんとしてもそのときのことを書いて大事にとっておかなければいけないという気になりました。そして、内の母（許子）ももう77歳。よくあの時生き抜いてくれましたという感謝を込めてこの内容を贈りたいし、自分も新たに日々日常生活を大事にしていきたいと思いました。2008年5月4日(日)だと思いますが、そんな気持ちでおおわれていた時、突然母から電話がかかってきました。こちらからは電話していなかったのに携帯に電話

が入ってきたから、ということで電話してきたので、その当時のことを詳しく聞くことにしました。小さい頃から「怖かった」ということをよく聞かされていたのですが、それがどんなものかは余り具体的に聞いたことはありませんでした。なるべく多くのことを聞きたかったのですが、母も記憶がはっきりしていないところも多い。私は途中で急に腹が痛くなり一時電話をきり、用をたしてから、また聞こうと電話をしたのですが、出たのは母ではなく父でした。

「母さんは余り話したくないって言っているよ。余り思い出したくないって。」私はかわいそうなことをしてしまったと思いました。ごめんいやなことを思い出させてしまっ。と心の中で、あやまりました。そして父はその日の事を自分の体験したことをよく話してくれたので、自分のこの「物語」の中に、登場させることにしました。かあさんどうもありがとう。もう充分だよ、後は自分でこの「物語」を完成させるから。

そうこれは事実の「記録」ではありません。「物語」です。内容の半分くらいは想像です。会話の内容などは全てと言っていいでしょう。想像です。これは「東京大空襲」を書いた人も言っていたのですが、事実の「記録」だけだと、余りにもむごすぎる物になってしまう。

感動を呼ぶためにある程度の脚色は必要になってくるといっていました。私もそうだと思います。自分も本当はどうだったのかという事も知りたいのですがそれよりも一人でもこの「物語」を読んで感動してくれて、皆もあの戦争いきのこった子供であり、孫であるんだということを再確認してくれて、日々の生活を充実したものにそして、大切にすごしていただければ充分目的は達成できたと思っています。特に増本家から生まれた子、お孫さんたちには読んでほしいと思います。もうほとんど会うことはありませんが、私たち子供、そしてお孫さんたちはあの時、一人も死ななかつた増本家から派生した子孫なのです。この幸運を時には思い帰し、時には話し合ってみてください。

初めはタイトルのように「母親の・・・」といったように母の事を中心に書こうとしたのですが、どうしても私にとっては、祖母を中心に書かなければならなくなりました。この祖母とは一度も会うことは出来ませんでした。戦後病気で亡くなったと聞かされております。いとこの中でも私が一番年長ですから、いとこの誰も増本家のおばあちゃんには会ったことはありません。この祖母を中心に書かないと祖母はいったいなにしていたのだろうということになり、私

の中でつくりあげた祖母像を作り上げて、登場させました。そして今度は自分の母が薄れてきてしまう。母の兄弟もいれなければ。ということで母親たち兄弟も副次的に書く。その中でも「イクコ」おばさんは健康で（別名も兄弟の中でもらっていない）空襲の日にはぐれてしまって公衆便所になげで助かったということを母から聞いたので特別に書くようになりました。薄れる母親像。でもあの戦火の激しさを考えればそのとき何を考え、何をしたが薄れるのもいいのではないかとおもっています。とにかく逃げるしかない。これがそのときの支配していた気持ちの中心であったはずです。

私はこれを母親に贈り、母親の許可があれば、おばさんおじさんたちに送りたい。そしておばさんおじさんたちが「ちがうよ。本当はこうだったんだ」ということがあれば、また別に「\_\_\_\_\_おじさん編」、「\_\_\_\_\_おばさん編」を書いてみたい。

とにかくドラマ「東京大空襲」であったような空襲の状況、バックドラフト見たいな火炎の流れ、これらは調べてみたのですが、本当にあったそうです。あの空襲にも生き抜いてこられた方に本当に感謝したい。

そしてドラマの最後で「ほら、あなたが愛した町は、こんなに立派

になりました。」といていましてが、私にはそれが素直にうなずけませんでした。なぜなら町は立派になったかもしれませんが、人は自殺の数が増えているように決して立派に生きられていないからです。本当にもったいない。自殺者は年に3万人以上。3年もたてば、東京大空襲でなくなられた数10万人を超えてしまう。生命軽視の風潮は未だに変わっていないと言っても間違いのないのではないのでしょうか。それだからこそ、この「物語」はお孫さんたちにも読んで貴重な日々を実感できる一人一人になってほしいと思っております。

2008年5月25日（日）午前3時終了。